

まえがき

今年生まれる子どもたちが、選挙権を手にする時、日本の社会を誇りに思えることを願います。しかし、私たちが今、判断を間違えば、環境や社会の危機に対し、何も行動を起こさなかった無責任世代として、非難の目を向けられることになるでしょう。それは私たちがこの10年でどう行動し、持続可能な社会に変えていけるか、その結果次第です。

SDGsは私たち人間が共有したいと望む社会に向けた道標です。ビジネス界の一過性の流行や、開発途上国への支援キャンペーンと片付けるのは早計です。また英語や専門用語が多くて分かりにくいのは事実ですし、人材や資金が限られている中堅・中小企業で取り組むのは容易ではないように思う方も多いでしょう。そのような懸念や疑問を抱いている方にこそ、本書を読んで頂きたいと思います。

それは、世界が持続可能（サステナブル）な社会に向けて大きく変わる中で、私たちは新しい価値観を取り入れ、大きなチャンスと、安心感を見いだすことができるようになるからです。人類は今までも輝かしい進歩を遂げてきました。これからはそれを土台として、無益な争

いを避け、平和で豊かな暮らしを手にすることが必ず可能になるからです。

世界を震撼しんかんさせたプーチン大統領によるウクライナへの軍事侵攻は、まさにSDGsの対極にある行動です。私たちがSDGsを推進しても、国家の暴力装置が発動されれば、社会は多くの犠牲と共に持続不可能な局面に晒されてしまいます。しかし、だからこそ、すべての人々が共存できるように、誰も取り残さずに、地球の資源や社会制度を「サステナビリティ」という新しい価値観で見直し、作り変えるべきなのです。

長い人類の歴史の中で、私たちはまさに人類社会の第2創成・新たな飛躍への扉を開けるのです。

私は小学生の時に大阪万博で刺激を受け、父の海外出張を羨ましく思いました。国際ビジネスマンを目指して、大学で英語会（ESS）に入り、海外事業で勢いのあったソニー株式会社に入りました。希望通り駐在は北米・南米・ロシア・中近東・欧州の5か国、計22年間に及び、人や文化の多様性、異質性を体験するとともに、人類共通の「幸せ」とは何かを考え、転職して世界の環境保護に取り組みました。現在はさらに広い領域をカバーするSDGsについて、企業の担う役割と機会を探る活動をしています。

SDGsが希求する「持続可能な開発目標」とは、一言で言えば「将来に向け、人や企業が健康に躍動し、よりよい社会を次世代に引き継ぐ」ということです。そしてその価値観を「サステナビリティ」と名付けました。しかし、この当たり前のことを目標に掲げるということは、裏を返せば、私たちの暮らしは今や持続可能ではなくなりつつあり、放置すれば崩壊するしかねないということです。

人類の危機が迫り、歴史の大転換点に立つ私たちは、判断を間違えるわけにはいきません。この先20年間の私たちの行動が、数百年先の未来を左右することになります。これにどう向き合い、チャンスに転換できるのか、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。ぜひ最後までお付き合いください。

仮に今、あなたは美しい山の頂に近い、由緒あるホテルの総支配人だと仮定しましょう。以前は毎日25人ほどの宿泊客がゆったりと滞在し、素晴らしい景色と美味しい食事を堪能しながら、平均6日ほど滞在していました。食材は近所の農場から調達してきました。

しかし今では80人近いお客で満室状態が続き、宿泊期間も8泊に延びました。新鮮な肉や野菜をこれ以上調達することは困難になってきました。あなたは今後、どのように、山頂のホテルを経営しますか？

あなたが本書を読み終えるまでに、経営方針を思い描くことができれば、大変嬉しく思います。

筒井隆司

2040年からの提言 — SDGs ネイティブの作る未来 — 目次

まえがき i

序章 人類に唯一残された生き残りの道 1

第1節 人生100年時代の是非 2

第2節 2040年はどんな世界になっているのか 4

1 2040年の未来予測 7

2 2040年の社会とは 8

第3節 サステナビリティと企業の下剋上 11

第4節 SDGsの理解と取り組みに向けて 15

第1章 持続不可能な人類 17

第1節 崩壊寸前に追い込まれた地球 18

1 感染症・COVID-19パンデミックに震撼する世界 19

2 気候変動から気候危機へ 20

3 気象災害の激甚化 23

| | | |
|-----|---------------------------|----|
| 4 | 生物多様性の喪失がもたらすもの | 25 |
| 第2節 | 地球の危機は人類が作り出した？ | 29 |
| 1 | 地球にとって私たち人間とは？ | 29 |
| 2 | 環境負荷にに応じて国をデフォルメした世界地図 | 31 |
| 3 | 消費者を「自覚無き加害者」にする企業は生き残れない | 32 |
| 4 | 増え続ける人口に対する考え | 35 |
| 5 | 地球温暖化から気候危機へ | 36 |
| 6 | 「不都合な真実」のその後——アル・ゴア氏との邂逅 | 38 |
| 7 | 生物多様性と企業の関係 | 39 |
| 8 | 愛知ターゲットの誤算と教訓 | 41 |
| 第3節 | 東京五輪と「SDGsウォッシュ」 | 44 |
| 1 | グリーンウォッシュ、SDGsウォッシュのリスク | 45 |
| 2 | 東京オリンピックはSDGsウォッシュか？ | 46 |

第1節 地球は1つ。しかし価値観はそれぞれ 52

1 価値観の多様性 52

2 異なる国でも人間の基本的な希望はほぼ同じ 54

3 「知らない、見ない」で世界は持続不可能になる 58

4 国際社会は196の不揃いの輪が繋がったチェーン 60

5 企業も社会利益を考える時期 62

第2節 世界一サステナブルな国「ニッポン」 64

1 世界に誇るサステナブル企業が集結するニッポン 65

2 SDGs誕生に至った背景 68

3 SDGsのこれまでの進捗 70

4 日本のSDGs進捗度ランキング 71

5 SDGsの正しい理解と取り組みに向けて 74

6 価値観の強要 75

第3節 世界の中のニッポン 77

1 辺境の国と世界の多様性 77

2 国際ルール形成への道のり 79

第3章 大転換期と日本企業

.....

第1節 人類史の転換期 84

- 1 日本の近代史と「時代の要請」 84
- 2 次世代にフェアにバトンを渡す現役世代の責任 88
- 3 アナン事務総長の慧眼^{けいがん} 90

第2節 技術は転換期をリードできるか 92

- 1 先端技術と持続可能性 92
- 2 資源としてのCO₂ 94

- 3 CO₂を原料とする産業の将来の見通し 95

第3節 ゼロカーボン社会への挑戦 98

- 1 再生可能エネルギーで電力需要を100%満たすために 98
- 2 日本政府が掲げた2030年の46%削減目標 100

第4節 社会制度は転換期をリードできるか 102

- 1 東京証券取引所のコーポレートガバナンス・コード改訂の意図 102

- 2 日本の産業の二極化 104
- 3 中小企業への期待 106
- 第5節 社会を下流から見上げてみる 108
- 1 自然界には存在しないごみ 108
- 2 ごみは社会を映す鏡・成熟度の基準 109
- 3 「拡大生産者責任」を強化する動き 109
- 4 欧米の動向 112
- 5 自然から学ぶバイオオミメティクス——「社会の腎臓と大腸」を作る 113
- 6 廃棄物が少ない企業が勝つ時代 114
- 7 3Rから7Rへ 115
- 8 廃棄の多い産業1 アパレル 116
- 9 廃棄の多い産業2 食品 118
- 第6節 リサイクルが変える世界 127
- 1 リサイクル技術と循環型社会への寄与 127
- 2 廃棄物の再生で技術革新を促す 129
- 3 リサイクル・マテリアル市場の形成 131
- 4 リバースロジステイクス——「静脈物流」の整備に向けて 132

5 SDGsのゴール#17——新たな連携 134

6 循環経済パートナーシップ 137

第4章 2040年からの提言

.....

第1節 なぜ2040年か 138

1 2040年の世界予測 139

2 科学的に見た地球の収容力の限界 142

第2節 世界を導く「Youth-quake」の力 145

1 2060年の社会を考える若いリーダー 145

2 SDGsはこれからのリーダーの必修科目 147

3 2040年はジェネレーションYとZが実質消費を左右する 148

第3節 民主主義の真意はどこにある？ 150

1 少数意見の価値 150

2 声なき声に応えられる社会 152

第4節 SDGsの認知加速がもたらす変化 154

1 就活生の志望企業選択基準 154

| | | |
|---|-------------|-----|
| 2 | サステナブル人財の使命 | 156 |
|---|-------------|-----|

第5章 22世紀の老舗(SHINEISE)とは？

| | | |
|-----|---------------------------|-----|
| 第1節 | 老舗とSHINEISEの違い | 160 |
| 1 | 地球と人間の新しい関係 | 162 |
| 第2節 | 会社経営に大きな影響をもたらすSDGs | 165 |
| 1 | CSRとSDGs | 165 |
| 2 | SDGs経営とは？ | 167 |
| 第3節 | 企業がSDGsに取り組む意味と、5つのレベルの整理 | 169 |
| 1 | SDGsを教養に留めないための行動 | 169 |
| 2 | SDGsを経営に実装するという意味 | 171 |
| 第4節 | 日本企業が国際社会で生き抜くために | 188 |
| 1 | 日本企業の横並び意識とNGOとの連携 | 188 |
| 2 | 企業の持続可能性を左右する要素 | 190 |
| 3 | 経営トップのコミットメント | 191 |
| 4 | 社内の中堅マネジメントの自分事化 | 192 |

| | | |
|---|-----------------------|-----|
| | 第5節 企業を成長させる力、企業を蝕むもの | 194 |
| 1 | 沈黙は共犯である | 194 |
| 2 | 本当の経営ガバナンスとは | 198 |
| 3 | リーダーは「座長」から「座央」へ | 198 |
| 4 | 中央統制からネットワーク型の権限移譲へ | 200 |
| 5 | 課題解決の先送り | 201 |
| 6 | 社員のエンゲージメントを高めるには | 202 |
| 7 | 今世紀のサステナブル企業とは？ | 203 |
| | 第6節 グローバル企業の使命 | 205 |
| 1 | グローバル企業の貢献価値 | 205 |
| 2 | 世界の知恵を集められる可能性 | 206 |
| 3 | 世界の人材を募り、組み合わせる力 | 207 |
| 4 | 世界の資本を注ぎ込む力 | 208 |
| 5 | 世界の課題に取り組むリソース | 209 |
| 6 | 国境を越えて未来社会を考え、変える責任 | 211 |
| | 第7節 具体的な取り組みに向けて | 213 |
| 1 | 欧米企業の動体視力とルール形成への野心 | 213 |

| | | |
|-----|---------------------|-----|
| 2 | ノハム協会が推奨する6つの取り組み分野 | 215 |
| 3 | 業界別の主なSDGs取り組みポイント | 217 |
| 第8節 | 飛び込んでみた「国際環境NGO」 | 220 |

| | | |
|---|--------------------------|-----|
| 1 | 経験を活かせない転職に挑む | 220 |
| 2 | 法整備が不十分な国と持続可能性 | 222 |
| 3 | 政府とNGO、企業(FPO)とNPOの違い | 223 |
| 4 | WWFと支援者、人材、活動 | 224 |
| 5 | 戦略、One Planet Lifestyle、 | 227 |
| 6 | 企業パートナーシップ戦略 | 231 |
| 7 | 「持続可能な天然ゴム」トヨタ×WWFジャパン | 232 |

第6章 歴史の傍観者にならないために

| | | |
|-----|------------------|-----|
| 第1節 | 競争から協創の時代へ | 236 |
| 1 | グローバル・リーダーシップ | 238 |
| 2 | SDGsの先を考えるリーダー教育 | 239 |
| 3 | 共感と支配を上回る | 240 |

第2節 企業で働くということ

243

1 企業の中の選択と自己責任

244

2 勤労の報酬について

245

3 歴史の傍観者に甘んじるのはやめよう

247

4 SDGsの「開発」という言葉について

251

5 きれいなこと・青臭い議論・べき論の活性化

253

6 No harmな世界とは

255

第7章 SDGsからNo harmな世界へ

第1節 2040年からの提言——20年後に後悔しない行動を今！——

258

1 2040年シナリオの準備

259

2 公共交通による移動はすべて無料化

264

3 2040年に生まれている新しい仕事

277

第2節 「流汗悟道」梅下村塾の梅津塾長の教え

279

1 誰も取り残さない。多様性を力に

281

2 日本の社会規範

281

| | | |
|--------|----------------------------|-----|
| 第3節 | SDGsの応用—自分のサステナブルなゴールを考える— | 283 |
| 第4節 | ノハムという生き方 | 285 |
| 1 | SDGsの目標年が2040年に延長される可能性 | 285 |
| 2 | ポストSDGsビジョン | 286 |
| 3 | 本質は何か? | 286 |
| 4 | 他を犠牲にしない生き方 | 288 |
| 5 | 世代間格差をなくす | 289 |
| 第5節 | 日本ノハム協会の使命 | 291 |
| 1 | 持続可能なアジア太平洋の実現 | 291 |
| 2 | 誰も取り残さないというコミットメント | 293 |
| 3 | 企業ネットワークのHUB | 294 |
| 第6節 | 山頂のホテルの未来 | 296 |
| あとがき | | 299 |
| 主な参考文献 | | 302 |